

津軽半島の漁村の生活と民俗

——青森県東津軽郡平館村今津——

山本質素

および漁撈組織に関する生活慣行は大きく変化し、生活の中に深く浸透して、人々の中に認識、記憶されてきたことは本文の中で述べた通りである。

- 一 概況（過疎とヤマセと）
- 二 今津の経済・社会生活と信仰

論文要旨

陸奥湾に面した平館（たいらだて）村は、津軽半島東岸に南北に長く広がる。村の西部にはブナ林やヒバ林を主体とした山地が広がり、居住領域、耕作領域はともに小さな村である。広大な山林は約八〇%が国有林であるために、林業は主要な産業とはならず、また夏季のヤマセや冬季の積雪に代表される、当地方の寒冷な気候が農業基盤の拡大を拒んできた経過がある。このために湾内漁業が村の基幹産業であり続けた。

生活の中に占める「漁業」の大きさや、厳しい気候はこの地域の生活条件を大きく規定してきた。昭和三〇年代までの歴史の中では、北海道のニシン場への「雇い」形態による漁業従事者（特に青年層）の転出とその後の帰村を生み、昭和三〇年代以降の高度成長経済下では「出稼ぎ」の増加と挙家離村を生み出した。前者は村内の家関係（特に歴史的深度での本家分家関係）を複雑にし、後者は村内の世帯・人口をともに減少させた。生活や民俗を支える家族・社会的基盤は歴史の中で大きく変化してきた。

生活と民俗における地域的な特性を把握するべく、平館村内の今津部落に焦点を当て、主生業の変化、生活条件に適合した慣行の変化、および広範囲に分布する慣行とが織りなす生活の姿を描写することを目標において調査を進め、ここにその成果を報告することができた。しかし本稿では基礎的資料の提示に大部分の頁をあてざるを得ず、地域性研究のための記述は素描にとどまることをお断りしておく。